

第 10 回秋季研究集会発表要旨

■ [発表 1] 和久井 遥(東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)

「散発的にデジタル化したデータの管理手法について」

多様な記録メディアが普及していく中、博物館などでも日々の業務・研究で様々なデジタルデータが作成され、記録メディアに格納・蓄積されている。それらの中にはコンテンツ作成などの単発業務・研究で作成された散発的データや、他所で作成されたデータのコピーなど、体系的に管理されていないデジタルデータも少なくない。しかし組織内に散在する記録メディアは放置されがちであり、内容を把握している職員も少ない。本発表では、組織内に散在する記録メディアを把握して適切に記録をとり、長期的な保存にむけて管理する手法について提案する。

■ [発表 2] 竹内 俊貴(九州国立博物館学芸部文化財課アソシエイトフェロー)

「文化財情報システムを活用したウェブサイトでの情報公開と課題」

九州国立博物館では平成 28 年度に当館所蔵品の検索システムをウェブサイトで公開し、平常展の陳列品リストページをリニューアルした。既存の館内システムを利活用することで情報公開・修正に係る新規作業を極力減らしつつ、利用者に提供するサービスの向上を実現している。本ウェブサービスが、情報の発生源である学芸と外部から問い合わせを受ける事務との情報共有を円滑にしている観点から、博物館内の業務を媒介するシステムの役割および公開情報の活用について報告・検討する。

■ [発表 3] 齋藤 歩(学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程)

「建築図書と著作権：アーカイブズ機関での受入れと利用にともなう法的課題」

建築生産プロセスで作成される建築図書（図面や契約書等）は、建築分野のアーカイブズ活動の中心となる資料であり、著作権法により設計者の著作物として位置づけられる。日本で設計業務にともない締結される契約では、設計者のこうした著作権を、建築主が部分的に制限することがある。その目的は、建築図書の利用や譲渡に建築主の意向を反映させることによって、建物の複製等を防ぐことにある。しかし、このような契約が、アーカイブズ機関が設計者から建築図書を受け入れる際に、寄贈・寄託や利用を難しくする場合がある。本研究では、以上のような建築分野の著作権に関係する法的課題について、日米比較により検討し、日本で建築アーカイブズが実現するために必要なポイントを整理する。

■[発表 4] 寺師 太郎(凸版印刷株式会社文化事業推進本部技術開発部)

「デジタル画像のリファレンスについて」

写真がアナログからデジタルに移行して15年程が経つが、肉眼で直接「色」を確認することが不可能なデジタルデータの「色」をどのように担保すればよいのか。デジタルアーカイブ、文化財写真や記録写真を撮影する上で、どのようなリファレンスを残すことが必要なのか。メタデータとしての環境情報、デジタルカメラの分光特性とその取得から活用の可能性について、国宝銅像阿弥陀如来坐像の文化財修理国庫補助事業における記録写真を例にして考える。

■ [発表 5] 金子 貴昭 (立命館大学アート・リサーチセンター)、山路 正憲 (立命館大学アート・リサーチセンター)

「テキストアノテーションシステムによる歴史資料(文献)の有機的活用—江戸期出版記録を事例として」

現在、立命館大学アート・リサーチセンターでは、テキストアノテーションシステムの開発を進めている。本発表では、江戸期の出版記録テキストアーカイブを事例として、当該システムの有効性について検証するとともに、関連する既存データベース(古典籍・板木等)と連携させることによって、その可能性を提示する。また、wikiシステムとの連動などによる、構築から活用までを見据えたテキストアーカイブシステムとしての将来像も示したい。

■[発表 6] 赤間 亮 (立命館大学アート・リサーチセンター)

「R.Keyes, P.Morse 編「北斎版画作品カタログレゾネ」WEB 公開システム」

当該カタログレゾネは、ピータ・モース、ロジャー・キーズ両氏の編になる90冊にも及ぶ分厚いファイルにまとめられた研究成果である。収録作品数は3969作品とそれほど多くはないものの、商業複製物として「大量」に残る浮世絵版画をできる限り実見し、「摺順や異版」について詳細に判定を加えている。こうした極端に高められた専門性をシステム上で融合実現させた「版画」のオンラインカタログレゾネは現状では存在しないようである。本発表では、「木版画」のカタログレゾネをWeb上で効果的に表現する前提としてのWeb環境について論ずる。